魏書倭人伝の探究

～「文献的事実」の解明に向けて～

著者　岡上　佑

◆「文献的事実」の解明を目指す本
→魏志倭人伝の成り立ちを究明せんとする
→古墳・銅鏡・遺跡などは、一切考察しない
→文献の対象はあくまで「魏志」のみ、
　日本書紀・古事記も度外視されている

◆その文献研究も「ワンイシュー」で、
論点は極めてシンプル

「御覧魏志とは何か？」

◆「太平御覧」

・北宋・太宗の時代の百科事典（類書）
・合計千巻
・太平興国年間（９７７年～９８３）年成立
　→魏志倭人伝の通行本（百衲本）の原本は、
　　南宋時代だから、時期としては、より古い。
・四夷部にいわゆる「魏志倭人伝」の引用がある

～何故、御覧魏志なのか？？？～

A. ◆ 御覧魏志を読めば、「ヤマタイコク」論争は、一挙に解決するから。

「邪馬壹国（邪馬壱）」→ ジャマイツ国

壹（イツ）＝　通行本魏志
臺（タイ）→　後漢書・梁書などを参照、通説

御覧魏志　本文（旅程部分・抜粋）

■又南水行二十日至於投馬国 、戸五万、置官曰彌彌、副曰彌彌那利

（又、南に水行して二十日、於投馬国に至る。置官して彌彌といい、
副は彌彌那利という）

■又南水行十日、陸行一月至**耶馬臺**国 、戸七万、女王之所都、
其置官曰伊支馬、次曰彌馬叔、次曰彌馬獲支、次曰奴佳鞮、
其属小国有二十一、皆統之

（又、南に水行して十日、陸行して一月、耶馬臺国に至る。
其の官を置くに伊支馬といい、次は 彌馬叔といい、
次は彌馬獲支といい、次は奴佳鞮という。
その属する小国は二十一あり皆これを統べる。）

■又南水行十日、陸行一月至**耶馬臺**国 、戸七万、女王之所都

通行本魏志　→　「邪馬壹(壱)」

御覧魏志　　→　「**耶馬臺(台)**」

ye su

耶 -　耶 蘇 教の「耶」

御覧魏志が古いとすると、ジャマイツ国とは、読めないことが判明する

■景初二年（238年）？　景初三年（239年）？

通行本魏志　→「景初二年」

公孫淵の征討中の朝貢でおかしくないか？

梁書や日本書紀に引用された魏志では、景初三年が通説。

御覧魏志　→「景初三年」

<u>御覧魏志が古いとすると、景初三年であったことが、判明する</u>

（通行本テキストに間違いがあると予想した通説を立証）

御覧魏志は、「読めばわかる」テキスト

通行本魏志は、読んでもわからないテキスト
　→ 甲論乙駁　にしかならない。
　　（その中で比較的有利な説が通説となっていただけ）

テキスト　「マサルは東大にいった」
　　↓
文献的事実　マサルは東大にいった

文脈の指示というレベルではなく、文意・語意という
文字そのもの本来的機能として、「文献的事実がわかる」
（文献的事実の真偽は、実際の証拠（遺物・遺跡、その他文献）が必要）

直線読み　か？　放射読み　か？　も解決

■又南水行二十日至於投馬国 、戸五万、置官曰彌彌、副曰彌彌那利

■又南水行十日、陸行一月至耶馬臺国 、戸七万、女王之所都

「又」が使われることで、直線読みが正しいことが直ちに判明。
文字による明確な指示があり、他に解釈することが許されない。

すなわち、九州北部から水陸都合二ヶ月の場所が耶馬台国

日本海ルート　か　瀬戸内ルート　か？　も解決

■又南水行二十日至**於投馬**国 、戸五万、置官曰彌彌、副曰彌彌那利

通行本魏志　：　投馬国　（ヅマ国？）
御覧魏志　　：　於投馬国（エヅモ国）

音韻的に「出雲（いづも）国」と判明。
面白いことに、裏日本方言では、「イヅモ」は「エヅモ」と発音

通行本魏志　：　投馬国　（ヅマ国）
御覧魏志　　：　於投馬国（エヅモ国）

投 – 度候切(Du Hou = Dou)
　濁音（全濁）の文字　（広韻）

◆「投」は、魏晋代の中古音では、濁音
◆やまとことば　では、濁音で始まる語彙が少ない

→発音上の矛盾が解決

やまとことば　- 訓読み、日本在来の言葉

身体名称：

かお、あたま、むね、あし、て、め、くび、
まゆ、ほお、みみ、はな、つめ、うで、ひじ
ひざ、かかと、はら、かた、、、、

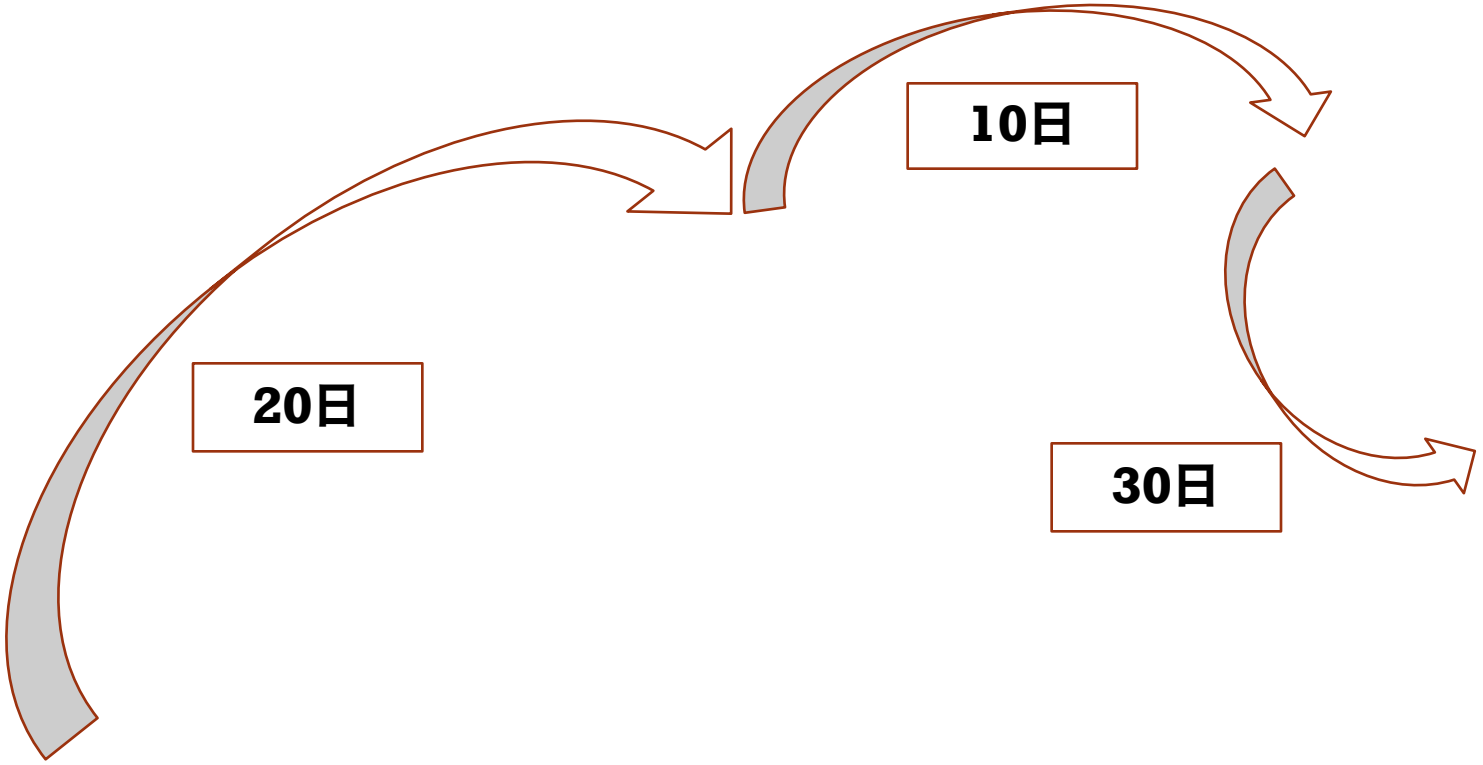
地名：

やまと、かわち、いづも、きび、つくし、くまそ、
くわな、あすか、なら、おおさか、しなの、
むさし、こうづけ、むつ、えみし、ひだ、すわ
はりま、たにわ、たんば、たじま、、、

「至　於投馬国（いづも国に至る）」　か
「至於　投馬国（づま国に至る・強調）」　か

→やまとことばの法則として、地名として不自然
→旅程記事の他の全ての箇所で「至」字のみ。
→「至於」で、強調の意味だとしても、最終目的地でない場所で、強調が行われたという解釈は不自然。

余分な文字（衍字）として、編者に考えられて、本来的な魏志（御覧魏志）から省かれたのでは？



御覧魏志では、直線読みで都合二ヶ月の日程が
見事に再現されている。

以上の検討から言えることは、

　北宋に引用された御覧魏志が、通行本より古い形の魏志倭人伝を示しているのであれば、邪馬台国の位置は、九州北部より於投馬国を経由して直線的に二ヶ月にて到着する場所ということで確定する。

　ただし、**御覧魏志のテキストが、通行本より古い形の魏志倭人伝を表しているのであれば、**である。

＜御覧魏志のテキストが、通行本より古い形の魏志倭人伝を表している＞

このことは、実は数十年前に証明済み。

三木太郎「魏志倭人伝の世界」

→証明の手法はどう言ったものか？

「魏志倭人伝の世界」の証明の手法

①陳寿「三国志」は、編纂されたもの。
　-編纂とは、資料を組み合わせること

②「魏志」の参照元
魏書 – 王沈による。
魏略 – 魚豢（ギョカン）による。
　二冊とも散逸しているが、一部は引用文として残っている。
　特に魏略は、倭人伝と似たような文章の逸文が
　「翰苑」という書物に残っている。

「魏志倭人伝の世界」の証明の手法

◆「翰苑」に残る魚豢の「魏略逸文」は、陳寿が「三国志・魏志倭人伝」を編纂する際に参照したテクスト。

◆「魏志倭人伝」と「魏略逸文」、「御覧魏志」という三種類のテクストを比較参照することで、「御覧魏志」の正体がわかる。

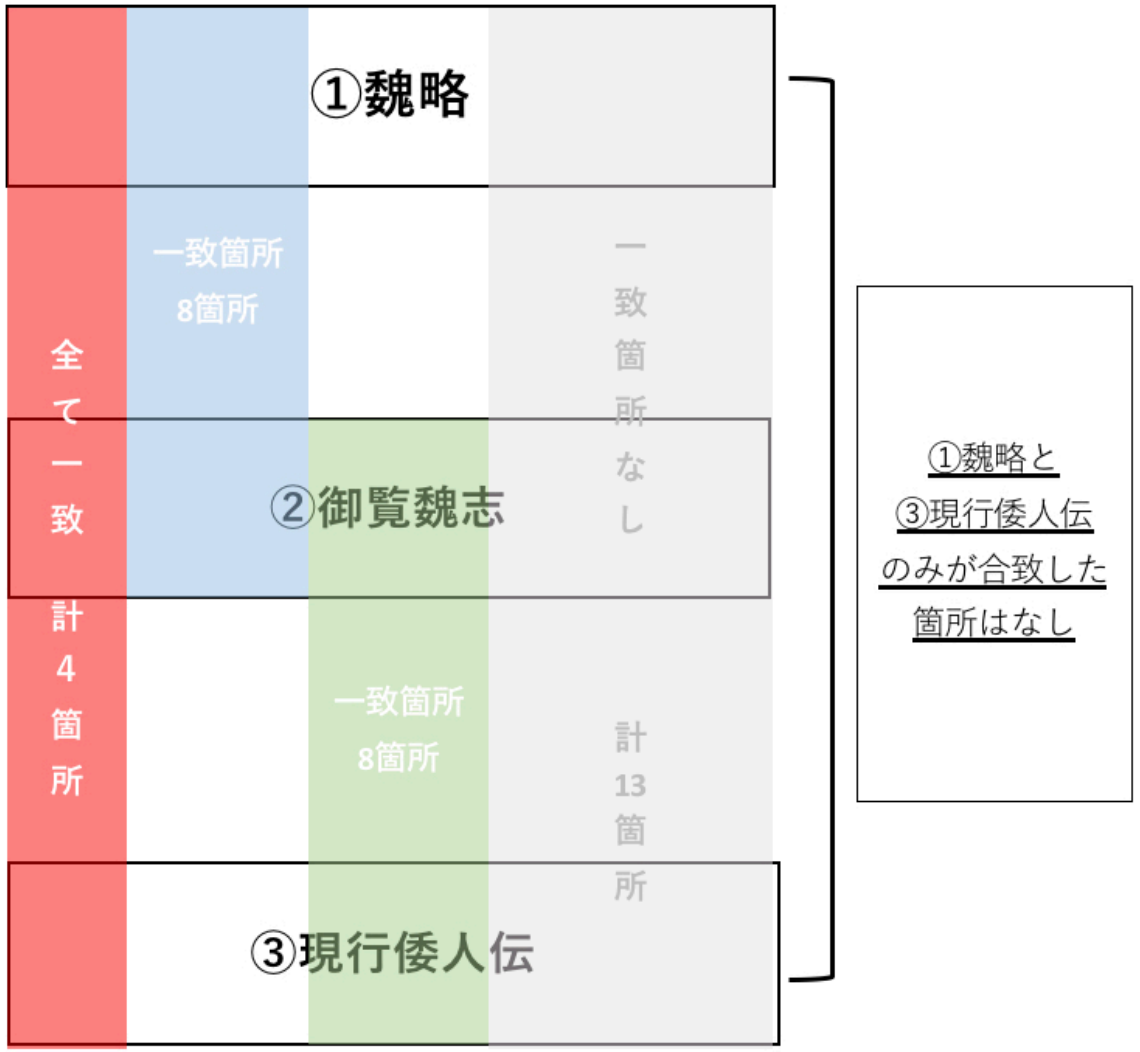
比較の方法は、三者共通部分の「御覧魏志」テキストを小分割して、
それぞれの合致具合を確認した。

比較詳細

記事番号	①魏略逸文	②御覧魏志	③現行倭人伝	対応表		
				①	②	③
1	倭国	倭	倭人	X	X	X
2	在帯方東南大海中	在帯方東南大海中	在帯方東南大海之中	○	○	X
3	依山島為国	依山島為国	依山島為国邑	○	○	X
4	渡千里復有国皆倭種	旧百余小国漢時有朝見者今使譯所通其三十国	旧百余国漢時有朝見者今使譯所通三十国	X	X	X
5	従帯方至倭循海岸水行	従帯方至倭循海岸水行	従郡至倭循海岸水行	○	○	X
6	歴韓国	歴韓国従乍南乍東	歴韓国乍南乍東	X	X	X
7	到狗邪韓国七千余里	到其北岸狗邪韓国七千余里	到其北岸狗邪韓国七千余里	X	○	○
8	始度一海千余里　至対馬国	始度一海千余里至対馬国	始度一海千余里至対馬国	○	○	○
9	其大官曰卑狗　副曰卑奴	大官曰卑狗　副曰卑奴母離	其大官曰卑狗　副曰卑奴母離	X	X	X
—	—	所居絶島　方四百余里　～ 地多山林	所居絶島　方可四百余里～有千余戸			
10	無良田	無良田	無良田	○	○	○
11	南北市糴	食海物自活　乗船南北市糴	食海物自活　乗船南北市糴	X	○	○
12	南渡海	又南渡一海一千里　名日瀚海	又南渡一海千余里　名日瀚海	X	X	X
13	至一支国	至一大国	至一大国	X	○	○
14	置官至対（馬）同	置官与対馬同	官亦日卑狗　副日卑奴母離	X	X	X
15	地方三百里	地方三百里	方可三百里	○	○	X
16	又渡海千余里	又渡海千余里	又渡一海千余里	○	○	X
17	至末盧	至未盧国	至末盧国	X	X	X
18	回人	戸四千濱山海居人	有四千餘戸　濱山海居　草木茂盛行不見前人	X	X	X
19	善捕魚	善捕魚	善捕魚鰒	○	○	X
20	能浮没水取之	水無深浅皆能沉没取之	水無深浅皆沉没取之	X	X	X
21	東南五東里	東南陸行五東里	東南陸行五東里	X	○	○
22	到伊都国	到伊都国	到伊都国	○	○	○
23	戸万余	官曰爾支　副曰泄謨觚柄渠觚	官曰爾支　副曰泄謨觚柄渠觚	X	○	○
24	置曰爾支　副曰洩渓觚柄渠觚	有千余戸	有千余戸	X	○	○
25	其国王皆属王女也	世有王皆統属女王	世有王皆統属女王国	X	X	X
—	—	帯方使往来常止住 ～ 皆統之	郡使往来常所駐 ～ 境界所尽			
26	女王之南又有狗奴国	女王之南又有狗奴国	其南有狗奴国	○	○	X
27	以男子為王	以男子為王	以男子為王	○	○	○
28	其官曰拘右智卑狗　不属女王也	其官曰拘右智卑狗者　不属女王也	其官有狗古智卑狗　不屬女王	X	X	X
29	自帯方至女国万二千余里	自帯方至女国万二千余里	自郡至女王国万二千余里	○	○	X
30	其俗男子皆黥而文	其俗男子無大小皆黥面文身	男子無大小皆黥面文身	X	X	X
—	聞其旧語自謂太伯之後昔夏侯～	聞其旧語自謂太伯之後又云～	自古以来～			
31	倭南有侏儒国	又有侏儒国在其南	又有侏儒国在其南	X	○	○
32	其人長三四尺	人長三四尺	人長三四尺	X	○	○
33	去女王国四千里	去倭国四千余里	去女王四千余里	X	X	X

比較結果

魏略と御覧魏志、現行倭人伝の相関関係



集計	個数	全て一致	一致率	
			個数	%
①魏略 と ②御覧魏志	8	4	12/33	36.4%
②御覧魏志 と③現行倭人伝	8	4	12/33	36.4%
①魏略 と ③現行倭人伝	0	4	4/33	12.1%
全て一致	4	-	4/33	12.1%
一致なし	13			
①魏略といずれか	12			36.4%
②御覧魏志といずれか	20			60.6%
③現行倭人伝といずれか	12			36.4%

＊魏略と通行本魏志が一致した箇所は、全て御覧魏志も一致している。

＊魏略と通行本魏志のみが一致した箇所はない。

「魏志倭人伝の世界」の証明から言えること

◆御覧魏志は、魏略と通行本魏志との中間的存在

つまり

◆通行本魏志は魏略を参照しているが、それにより近い存在が「御覧魏志」

すなわち

◆「御覧魏志」は、通行本魏志より古いテキストである。＜結論＞

「魏志倭人伝の世界」の証明から言えること

◆「御覧魏志」は、通行本魏志より古いテキストである。＜結論＞

＜＜注目するべき比較箇所＞＞

魏略　　：　女王之南、又有狗奴国

御覧魏志　：　女王之南、又有狗奴国

通行本魏志：　其南有狗奴国

太平御覧に魏志を引用した人物は、通行本魏志に「其南有狗奴国」としかないテキストを参照して魏略と一致するような文を引用することはできない！

「三木太郎は、御覧魏志のテキストが、通行本魏志よりより古い形であること証明した。」

これは事実として、肯定的に認めたい。
すなわち、御覧魏志の示す通り、魏志倭人伝は、
直線的に日本海ルートにて読まれるべきである。

しかし、この証明は世間には受け入れられることなく、
すっかりと忘却されるに至った

なぜか？？？

証明を認めにくい心理的抵抗感

（すでに邪馬台国についての研究を行い、直線読み日本海ルートの結論に至ったすべての論者。「掴んだものを手放す」）

◆御覧魏志を引用した人は、複数の資料を参照していたかもしれない。

（そうかもしれないが、複数の文献を参照しようとしても「於投馬」や「又」などを引用した人が勝手に付け足すものだろうか？）

◆御覧魏志のテキストは、魏略に近いと言っても、魏略とも異なりそのものではない。

「御覧魏志とは何か？」についての明確な答えがない！！

「御覧魏志とは何か？」

＜本書の内容①＞

＊三国志編纂の全般的傾向

＊魏志に込められた陳寿の執筆意図とは何か？

＊西晋に於ける陳寿の政治的立場の復元（陳寿は不遇？）

＊西晋と孫呉討伐と陳寿らの動向

＊西晋の政治状況そのものの解明

＊陳寿の務めた「中書省」の性質

＜陳寿は不遇か？＞

陳寿　233年～300年（？）

・蜀の旧臣（268年、晋に出仕）

・西晋では地方に左遷される（282年）

（魏志の内容を中書監・荀勗に咎められる）

・義母の墓を洛陽に作ったとして、礼教に違反し、不遇に終わる

→不遇の歴史家というイメージ（人物像）

一方で、曲筆して西晋に阿った人物であるという人物像もある

→司馬氏に媚びへつらい、挙句に左遷された残念な人物？？

＜陳寿は不遇か？＞

・蜀の旧臣（268年、晋に出仕）

巴西郡（現在の重慶市）の豪族出身

西晋での出仕は、佐著作郎

内閣官房とも言える中書令の張華の推薦

→中書省に仕える佐著作郎は、貴族の垂涎の清官！

・西晋では地方に左遷される（282年）

推薦した張華が281年に左遷される

中書省内で中書監と中書令の政治対立の激化！

（司馬氏に媚びるのは、西晋官僚なら必須の条件。

逆らった人物を司馬氏全て排除．晋の忠臣＝魏の逆臣）

＜中書省内の政治対立＞

中書監：秘書省と合わせた「中書省」の長官
中書令：内閣官房の中枢・中書の長官

中書監・荀勗　：　名族、荀氏の出身、貴族的素養は最高
中書令・張華　：　寒門出身、当時最高の知識人

征呉が目前に迫るにつれて、対立激化
荀勗　征呉に強硬に反対（朝廷内で多数派）
張華　征呉に賛成（朝廷内で少数派）

結果、征呉は大成功・張華は大いに名を挙げる

のはずが、、、、

＜本書の内容①＞
＊西晋と孫呉討伐と陳寿らの動向

本文一部抜粋

皇帝孫皓の暴虐により自滅の道を転げ落ちる孫呉。
それよそに、その征伐を足踏みした西晋の政治状況。
そして、征呉の結果として、その労苦を実際に担った功臣が次々に左遷されるに到った事態。

これらを理解するためには、この征呉問題、涼州反乱問題、皇太子不慧問題、
それに何より司馬炎と司馬攸の関係性の問題を解きほぐし、
その複雑に絡んだ諸問題に対して、張華と陳寿がどのような政治的立場をとったかを
見極める必要がある。

そして、その先に、魏志が内包する政治的主張があり、陳寿が左遷させられた
真の事情があるのだろう。

＜本書の内容②＞

＊魏志の政治的主張

＊魏略、魏書、魏志の比較

＊魏書の編纂・成立過程と魏志

＊魏略と御覧魏志と通行本魏志の参照関係と時系列の整理

＊三者比較から見える当時の世界観

＊「御覧魏志とは何か？」

＜本書の内容②＞

＊魏略・魏書・魏志の比較

陳寿は、三国志を「撰」した。

→歴史を書くとは、各種資料を比較参照してまとめること。

著者自らの見聞というのは、有限で限定的でしかない。

魏書　：　王沈著。魏の公的記録として、編纂される。

魏王朝、晋王朝の暗部を隠蔽

魏略　：　魚豢著。野史的傾向が強い。ゴシップ好き。

陳寿の魏書は、両著作を参照しながら「撰」された。

では、東夷伝を実際に書いたのは、本当に陳寿か？

＜本書の内容②＞

＊魏書の編纂・成立過程と魏志

魏志東夷伝における「今」とはいつか？

「今」の時点が特定できれば、東夷伝のベース部分をいつ書いたのかが特定できる。

幸運にも地の文の「今」のうち一ヶ所だけそれが分かるセンテンスが残っている。

◆今、句麗王宮是也。（魏志東夷伝　高句麗条）

高句麗王の位宮は、２０９年生まれの人物で、その在位は、２２７年~２４８年である。この「今」を含むセンテンスによって、東夷伝の地の文の土台の部分は、その２１年の間に執筆されたと限定される。

→つまり、東夷伝のベース部分を陳寿は書き写しただけということが「わかる」

「御覧魏志とは何か？」

明確な回答がある。

＜本書の内容③＞

＊「張華という人」

- 魏志成立後の西晋の政治状況の顛末記

＊「魏晋時代の洛陽」

- 中書省と皇帝権力の関係を図面化

＊「太平御覧・四夷部の検討」

- 編者が見た「魏志」とは？

＊「正史八年と以死」

-魏志倭人伝の漢文的に正しい読み

＊「曹植と宝剣」

-陳寿の政治的立場との関係から掘り下げ。随筆

＊魏略、御覧魏志、通行本魏志倭人伝全文

＊登場人物紹介、各種資料